レイン9
過去からの亡霊

吉野 匠 Takumi Yoshino

アルファポリス文庫

http://www.alphapolis.co.jp/

――☆――☆――☆――☆――☆――☆――☆――☆――☆――☆――

異世界に存在する大陸、ミュールゲニア。
科学文明の魔手はまだこの地を覆うことなく、廃れつつあるとはいえ、いにしえより伝わる魔法も細々と受け継がれている。

そんな、剣と魔法が支配する世界――

シェルファが見た予知夢。それは、レインの死だった。
このままではレインが死んでしまう！
運命を変えるためにシェルファが下した決断は、レインの上将軍解任だった。
しかし、かえってそれがレインを死地へ追いやることになる。

レインはレイグルたち魔族と決着をつけるため、セルフィーの制止を振り切り、一人ザーマインに向かった。上将軍であろうとなかろうと、レインにとって魔族は倒さねばならない相手なのだ。

ザーマインの王都リアグルで魔族クラレンスと遭遇したレインは早速、戦いを挑む。だが、その戦いは、女剣士アリサの乱入によって、うやむやに終わる。
そこへ、ノエルがレインを連れ戻しに現れた。レインは彼女の話を聞き、サンクワールへと帰還する……

――☆――☆――☆――☆――☆――☆――☆――☆――☆――☆――

※度量衡はあえてそのままにしてあります。

神聖ヴォルデシア帝国
魔教の島
ノーブ
システィーヌ
ローザンヌ
フォルテン
バジャ
ファヌージュ
ヴァンヘイム
アザト
テセト
ジブリ
タール
サグレム
オドロス
霧の国
テッセン
ダヤン
ザーマイン
ナシド砂漠
（乾きの海）
セレステア跡
リアグル
アヴェルーン
聖域
レビ湖
ポートフォリス
ガルドシュタイン
レイファン
クリスタルパレス
フェリアーナ
旧ルナン
魔物の森
ナルスガル
ヨーデンセ
シャンドリス領
シャトワール
システィン族
ブルガンディ
リディア
シャンドリス
バルザルグ
サンクワール
祐れ谷
ザワール
狼の島
MURGENIA

【ガサラム】
レインの副官

【セノア】
レインの副官

【レニ】
レインの副官

【シルヴィア】
ヴァンパイア・マスター

【ギュンター】
レインの腹心。主に諜報を担当

【セルフィー】
レインの部下

【フォルニーア】
シャンドリスの皇帝

【ジョウ】
シャンドリスの大将軍

【ノエル】
レインに味方する魔人少女

【ルミナス】
ザーマインの上将軍

【クレア】
謎の組織の宗主

【アリサ】
魔族を狙う戦士

主な登場人物

レイン

本編の主人公。本人曰く、「傲岸不遜と常勝不敗が売りの、世界最強の男」

ラルファス

レインの親友で、サンクワールの上将軍

シェルファ

サンクワールの姫王（プリンセスロード）。レインに好意を抱いている

レイグル

大国ザーマインを統べる王

目次

プロローグ　ただレインのみを　11
第一章　孤狼二人　22
第二章　過去からの亡霊　70
第三章　中原（ちゅうげん）侵攻　123
第四章　サンクワール軍の遠征　180
第五章　ルミナスの挑戦　216
第六章　蘇る孤狼　279
エピローグ　アイゼンの決断　298
あとがき　308
文庫版あとがき　310

プロローグ　ただレインのみを

ザーマインからの正使が胸を張って入室してきたのを見て、アイゼン王は玉座で苦笑した。

銀糸で織り出した模様付きの豪奢なマントを羽織った姿といい、傲然と顎を上げて歩く姿といい、単なる一使者のものではない。さすがに、世界を相手に戦う強国からの使いである。

一応は中原に連なる国とはいえ、このポートフォリスごときは、物の数ともしていないのかもしれない。

事実、膝丈のズボンとジャボのついたレースシャツ、それに無地のウェストコートという質素な姿のアイゼンを見て、使者は一瞬、唇の端を歪めた気がした。アイゼンの考えすぎかもしれないが、この手の直感は意外と当たっているものだ。

王らしからぬ格好だと思われたのだろう。

しかし彼は、謁見の間を進むうちに急いで表情を引き締め、衛兵の指示でアイゼンの玉座前に跪いた時は、すっかり恭しい態度となっていた。

「初めて御意を得ます、アイゼン陛下。私は主から使者を命じられました、ジョシュア・フォルタール・ハッシュと申します。お時間を割いて頂き、まずはありがとうございます。

中原きっての若き賢王との陛下のお噂は、我がザーマインにまで聞こえております」
男らしくやや角張った顎を撫で、アイゼンはまたしても微苦笑する。若い若いとよく言われるが、もはや玉座について十数年が経つのだ。
「嬉しい言われようだが、実際はもう三十も半ばを過ぎているさ。まぁ使者殿も気楽にしてほしい。冬に石床で跪くのも大変だろうし、立ってもいいぞ。私が許す」
アイゼンは自分こそ高々と足を組み、ざっくらばんに話しかけた。
王者としてはぞんざいな話し方に、使者の男はやや鼻白んだように見える。だが、すぐに何事もなかったようにすっとその場で立った。金髪碧眼のなよっとした容姿ではあるが、実は胆力もなかなかのものらしい……もっとも、それは彼のバックにある国の力あってこそかもしれないが。
「では、お言葉に甘えさせて頂きます」
ジョシュアはひたとアイゼンに視線を当て、切り出した。
「今日はこのポートフォリスの未来について、陛下といささか語りたく思い、参りました」
今度、唇の端を歪めるのはアイゼンの番である。また随分と迂遠な言い方をするヤツだと思う。少年っぽい外見に似ず、彼は策士を自認しているのかもしれない。
「ほほぉ……未来の話か。私はまた、『大同盟などに加わらず、我がザーマインに降れ』と言いに来たのかと思っていたが」
つい先日、レイファンの主城クリスタルパレスで、歴史に残る会議があった。城内

の「鏡の間」にて、中原の国々（と一部の小国）の王が集まり、大同盟の相談をしたのだ。
その噂は既に、大陸中に聞こえている。一応は秘密のはずだったのに、今や市井の民ですら知らぬ者がいないほどだ。
よって、その会議に参加していたポートフォリスにザーマインから使者が来たとあれば、他に用件はないはずなのだ。
しかし、金髪の若者はびくともしなかった。
「降るというのは一面的な見方です、陛下。陛下から見れば、ザーマインという大国を寄る辺とし、レイグル王の下で益々の発展を遂げる機会かもしれません」
両手を広げ、微笑と共に囁く。
「逆に大同盟などに加わると、愚か者達に足を引っ張られ、する必要のない大損をするかもしれません。……それは場合によっては、陛下のお命にも関わりましょう」
アイゼンの話し方に倣ったのか、使者としては随分と砕けた言いようだった。いや、むしろ危険なほど無礼な持ちかけ方かもしれない。その証拠に、アイゼンの左右に控えていた近臣や衛兵達が、明らかにざわついた。
皆、使者の生意気な言い方に腹を立てたのだ。アイゼンが目で抑えなければ、実際に抗議した者もいたかもしれない。
ジョシュアは、しかしアイゼンの目だけを見つめ、そちらは平然と無視していた。最初から「ここで説得する必要があるのはアイゼンのみ」だと、看破しているようだ。つ

まり、国情などの下調べは済ませているわけである……まあ一応のところは。
　アイゼンが考えるうちにも、彼の話はまだまだ続いている。
「――というわけで、レイファンごときに世評ほどの力はございません、陛下。無論、ガルドシュタインやフェリアーナも然りです。しかも悪いことに、この二国は最近まで頻繁に小競り合いを繰り返していた体たらく……そのような国同士が結んで、果たして我がザーマインに対抗できましょうや？　他の小国などは、もはや語るまでもありますまい」
「他の小国……たとえば、サンクワールなどもか？」
　半ば笑みを浮かべて大人しく話を聞いていたアイゼンは、初めて口を挟んだ。ジョシュアは一瞬、顔をしかめたが、すぐに立ち直った。
「ははは……前にガルブレイクの失敗がありましたな、確かに。しかし、そうそう幸運は続きませんよ、陛下。ましてや国力に乏しい小国なら、なおさらです」
「ふむ……使者殿はその小国の出身だと思っていたがな。まあ、今やザーマインに仕える身故、かつての故郷など関係ないか」
　下調べをしているのはなにもおまえだけではないぞ、という目で強張ったジョシュアの白い顔を見やり、アイゼンは平然と言葉を継いだ。
「まあ、それは置くとしてもだ。ザーマインが以前、サンクワールに敗れたことは否定できまい。つまり、レイグル殿は別に無敵ではない。おまけに、使者殿の誘いに乗って

降伏しても、ザーマインが大陸制覇を完遂したのちには、このポートフォリスがどうなるかわからん。私や近臣などは、用済みとして捨てられるかもしれぬ。かつての王や旧臣など、新帝国には邪魔なだけだからな。少なくとも私がレイグル殿の立場ならそう考える」
「それは考えすぎで――」
「それにまだある」
　勢い込んで身を乗り出すジョシュアを、アイゼンは悠然と遮る。
「レイグル殿とザーマインには、未だに最大の不確定要素があって、それがあのサンクワールだと私は思っている。あの国にはそれだけの実績があるからな……いや、より正確にはそのうちの一部にか」
　ははは、と声に出して笑う。
「そう、使者殿の言うところの『国力に乏しい小国』に、だ」
　少年じみた若者の顔に最初に浮かんだのは怒りであり、そして猜疑心が取って代わり、最後に小狡い表情に落ち着いた。刹那とはいえここまで内心を覗かせてしまうのは、若さのせいだろう。
「……その仰りようは、私にはいささか意外でした。胆力に優れるアイゼン陛下が、まるでサンクワールを恐れているように聞こえますよ」
「貴様、控えろっ」

玉座の右手に控えていた騎士隊長のローエンが、ついに前へ出ようとした。しかし、アイゼンはまた抑えた。

「ローエン、構わん。腹を立てるほどでもないさ」

「……はっ」

渋々といった様子で、ローエンは玉座の右手に戻る。彼の肩を叩いてやってから、アイゼンはまた前を向いた。

「私はサンクワールはもちろんのこと、レイファンを始めとする中原の国々をも恐れはしない。国力の差はあれど、やりようによっては勝てる相手だろう。しかし、残念ながらたった一人だけ例外がある。彼にだけは、とても勝てる気がしない」

一拍置き、はっきりと断言した。

「このアイゼンはただ一人、レインのみを恐れる」

不審そうに眉をひそめたジョシュアを見て、アイゼンは確信した。こいつと話しても、得るところはあるまい。

だが一応、礼儀として説明はしてやった。

「私はかつて、自分の持つ全ての力で彼と戦い、そして敗れた。同じことを二度しようとは思わぬ。……むしろ、二度とごめんだな。彼がザーマインの敵として立つ限り、残念ながらそちらに付こうとは思わん」

ゆっくりと首を振る。

「レイグル殿も恐るべき敵だと思う。だが、一方の陣営にあの男がいて、両者のうちどちらかを敵に回す必要があるというなら、私の答えは決まっている」

実に一国の王が――しかもれっきとした中原の強国が、たった一人の男にここまではっきりと「我、敵せず」と断言したことは、歴史上初めてだったかもしれない。

ジョシュアの唖然とした顔を見れば、ご多分に洩れず、彼もアイゼンとレインとの関わりを知らなかったのだとわかる。

「レインとは、あのサンクワールの一上将軍のことですか！　し、しかし陛下っ。あの男の武勇は確かに評判ですがそれにしても」

「まあ待たれよ、使者殿」

無情にも、あたふたする使者をアイゼンはまた遮った。

「かつて彼と戦った時、私と共に戦った者も、まだこの場には大勢いる。……皆の者、私の質問に答えてほしい」

突然、アイゼンは周囲に呼ばわった。

「当時、私と一緒にあそこで戦った者は手を挙げてくれ」

ふいに声をかけると、固唾を呑んで使者とのやりとりを見ていた壁際の近臣達が、一人二人と挙手していく。近臣に護衛を含め、この謁見の間には数十名の臣下達がいたが、

そのうちの八割以上も手を挙げた。
玉座の右手に立つ、騎士隊長のローエンも例外ではない。実に嫌そうな表情ではあるが、しっかり挙手している。
「ふむ、まだそう昔の話でもないから、意外と大勢残ってるな。――では重ねてその者達に問おう。今度の戦いで、あえて彼を敵に回してもよいと思う者は、そのまま手を下ろしてくれ」
ざわついていた広間が、嘘のように静まり返った。慌てて見渡したジョシュアをあざ笑うかのように、挙手した者全てが身動きすらしなかった。
渋面のローエンを含め、誰も手を下ろす気配がない。
なおしばらく待ち、アイゼンは苦笑と共に頷く。
「よくわかった。もう手を下ろしていい」
肩をすくめてジョシュアに告げる。
「見ての通りだ。彼を恐れるのは、なにも私だけではない。当時、同じくあの戦場にいた者全てが同意見ということだ……まあ、当時の戦いについて使者殿に説明する気はないが」
ジョシュアはしばらく口を半開きにして壇上のアイゼンを見上げていたが、やっと呻き声を絞り出した。
「……ば、馬鹿馬鹿しいっ。大昔の英雄崇拝ではありますまいに、ただ一人の傭兵上が

りに、なにをそこまで恐れるのです！」
苛烈なセリフだが、アイゼンは腹も立たない。静かに言い返すのみである。
「そう言うが、使者殿の主たるレイグル殿も、彼に敗れた過去があるようだが？」
「そんなもの、単なる風評ですっ」
「待てっ。陛下の御前でそれ以上の無礼な口の利き方は許さんっ」
「まあいいさ、ローエン」
今度はアイゼンも、半ば玉座を立って忠実な騎士隊長を止めねばならなかった。彼はもはや、剣の柄に手をかけていたからだ。
「そう怒るな。おまえにも覚えがあるはずだぞ、これが若さというヤツさ……ははは」
これにはジョシュアの方がむっとしたらしく、すぐに言い返してきた。
「お言葉ですが陛下、このジョシュアは年若き者なれど、決してそこらの若者のように浅慮ではありませぬ」
「そうかもしれないな。――だが」
アイゼンは穏やかにため息をついた。話し合いは終了とばかりに、衛兵に手を振る。
憮然とするジョシュアに、諭すように告げた。
「だがお主は、レインという男を知らないようだ」

駄目押しのように言葉を重ねる。
「そういう使者殿と、この件で話し合う価値があるとは思えんな」
それが会見の最後の言葉となった。
衛兵に引きずられるようにしてジョシュアは去り、後には近臣達のざわめきが再び満ちた。
それを待っていたかのように、ローエンが玉座の脇に跪く。
「陛下……私は確かに、彼を敵とすることには反対ですが」
しばらく目を落とし、ひそひそと具申する。
「しかし、あの戦いから既に十年近くの時が流れています。果たして彼は、我々の前に立ち塞がった当時と変わりないでしょうか？」
自分の考えに浸っていたアイゼンは、思わず微笑した。それはアイゼンの危惧するところと、全く同じだったからだ。要するにローエンは、「レインは昔と同じ気概、同じ力量を保っているでしょうか」と、そう訊いているのだ。
「その疑問は当然だな、ローエン。力量は置いても、時が過ぎれば人も変わる……それが世の常だ。聞こえる噂は相変わらずとはいえ、この目でしっかり確かめるべきだろう。レイファンでの同盟会議ではあいにくそのチャンスがなかったが、今から無理にでも機会を作るべきかもしれぬ」
アイゼンはまだ白髪の兆候もない漆黒の髪を手でかき混ぜ、大きく頷く。

そう、これは曖昧にしていい問題ではない。
自分と国の命運を賭けようというのだ。少しくらい自儘なやり方も許されるはずだろう。
そう考え、アイゼンは人知れず悪戯っ子のように笑ったのである。

第一章　孤狼二人

レインは意識のないアリサを肩に担ぎ、ノエルの手により、まずはリアグルに戻った。そこでクリスと合流し、ザーマインをすぐに離れている。

さすがにそろそろレイグル側がレイン達の侵入に気付く頃合いで、決断と同時に遁走したのは正解だっただろう。ちなみに国外に脱出した後、レインはノエルに頼んでサンクワール郊外に一度転移してもらい、眠れるアリサを途中の適当な森で放り出してきた。無責任極まるが、こいつをガルフォート城に連れ帰れば大騒ぎになるのは目に見えているので、やむを得ない処置だった……とレインは思っている。

なにしろこれまでの経緯からすれば、アリサはノエルを見ただけで、即座に斬り掛かるだろう。起こして事情を説明したところで、彼女が理解してくれるとは全く思えない。何があったのかは知らないが、アリサが魔族に対してひどく恨みを抱いているのは確かである。

そして言うまでもないが……ノエルの方も、攻撃されて笑って済ますほど甘い戦士ではない。たちまち殺し合いが始まるだろう。

そういう事情なので、帰還したのはレインとクリス、それにノエルのみとなった。もちろん、最後までノエルの転移能力に助けてもらったのは言うまでもない。

これで万事解決――言いたいところだが、本当に大変だったのはその後だった。

唯一の慰めはレインが帰還した時、シェルファが昏々と眠っていたことだろう。これは彼女の体調を心配したギュンターが、魔法を使って強制的に眠らせたもので、お陰でシェルファだけはその場にいなかった。

しかし、事情を聞いて悶々と待っていた他の仲間たちは、十分に大騒ぎとなった。

早い話が、レインはよってたかって仲間の全てから責められた、ということだ。

一応、「特攻かけるつもりだったが邪魔が入ったし、その後でノエルが来て事情を説明してくれたんで」などと簡単すぎる説明はしたものの、見事なまでに誰も納得しなかった。ノエルと一緒に王宮のサロンの一つに引っ張り込まれ、後は皆に言われ放題である。

半泣きの声でセノアから「何を考えてらっしゃるのですかあっ！」と胸を叩かれたと思えば、先に戻って（戻らされて）いたセルフィーからは抱き付いてわんわん泣かれ、レニからは滅多に見ない厳しい顔で、「さすがの自分も怒りますよっ」と真剣に睨まれ――といった具合である。他にも遅れて駆け付けたガサラムやミランなどからも、ガンガン愚痴られた。

一致しているのは、サロンに集まった仲間の全てが、泣くか怒るかしていたという点

である。もちろん、先に戻ったセルフィーが、何もかもバラした為だろう。
理由があったとはいえ、あっさり上将軍を解任された被害者の自分が、何故にここまで怒られないといけないのか？　などとレインも言い返したいところだが、皆が腹を立てる理由も分からないでもないので、弁解はしなかった。
ただそのうち、どさくさ紛れに遠くからユーリに「この大馬鹿ぁーーーっ」と怒鳴られるにつけ、さすがに神妙にしていたレインも怒鳴り返した。

「なんだとこらっ。殴ってやるからちょっとこっちこい、ユーリ！」

あいにくレインがそちらを見た時には、ユーリは光の速さでドアの向こうに消えた後であり、廊下を走る靴音だけが聞こえてきた。相変わらず、逃げ足の素早さは瞠目に値する。
そこでやっと、目を丸くして騒ぎを眺めていたノエルが発言した。それまでは、何が何やらわからず、ずっと静観していたらしい。
「そいつらの話を聞いてると、つまりなにか？　レイン……おまえは一人でゲイニス城に突撃するつもりだったわけか？」
少し考え、不審顔で付け足す。
「ええと……もちろん、そんなはずはないと思うが。私が何か勘違いをしているのだろうな」

彼女には珍しく、いかにも自信なさそうな顔だった。
レインは飾り彫り付きのテーブルのそばに立ったまま、うろんな顔でノエルを見返した。
「俺を迎えに来たくらいだし、事情は聞いてるんじゃないのか」
「いや、私はただ、解任が誤解だったという話をちょっと聞いた後、ギュンターとやらにザーマインでおまえを探すように頼まれただけだ。おまえの目的を聞こうにも、あいつがやたらと急いでてな」
ノエルは思い出したようにサロン内を見渡したが、ギュンターの姿はなかった。これは別に不思議ではない。彼は、こういう場面がとことん苦手だからだ。話があるとしても、レインが一人になった頃に来るはず。
そのことは特に説明せず、レインは肩をすくめた。
「だっておまえ、仕方ないだろうが。俺一人になったら、その方法が一番早くて、てっとり早いからな。……寄り道ナシに、まっすぐ頭を潰しに行く！　全くもって、俺好みの戦法だと思うぞ」
レインは大真面目に力説したが、賛同者は皆無だった。
まだレインに抱き付いたままだったセルフィーを含め、一同が呼吸も忘れたようにレインを見つめた。誰も彼も、物凄く呆れたような表情に見える。

特に、最初に質問したノエルの顔は見物だった。漆黒の瞳を一杯に見開き、口を半開きにしてまじまじとレインを眺めている。これまで彼女が決して見せたことのない、純粋な驚愕の表情だった。

やがてノエルは、ようよう掠れた声を上げた。

「よくそんなことを思いつくな」

「……おまえも、この城で似たようなことをやらかしたように思うが」

レインの指摘に、ノエルは首を振った。

「ここは別に、魔族が大勢いるわけじゃなかった。この私ですら……あそこへ単騎突撃を敢行するなど、やろうとは思わなかっただろう」

どう聞いても、好意的には取れないセリフである。だが実はこれは、ノエルにとっては最大級の賛辞だったのだが――いずれにせよ、レインが答えることはなかった。

なぜならそこで、ラルファスがサロンに入ってきたからだ。

こいつの様子がいつもと違うのは誰の目にも明らかで、それは最初にドアの方に目をやったレニが、怯えたように後退ったことでもわかる。そのうち皆がラルファスに気付き、自然とサロンの中を沈黙が支配した。

レインを含めた全員が、等しくラルファスに注目する。いつもの穏やかな笑顔はそこにはなく、レインを睨む目には笑みの欠片もない。

目が合った途端、ラルファスは短く切り出した。

「レイン、話がある」

「いや……先に腹ごしらえとかしたいんだが」

レインとしては、暗に「ゆっくり話せる夜にしないか、話は？」と言いたかったのだが……ラルファスの反応は劇的だった。ある意味ではレインですら意表を衝かれた。

返事を聞くなり、ラルファスは脇のテーブルにばんっと拳を叩き付けたのだ。

「話があると言ってるんだっ！」

殴るのに、よほどの力が籠もっていたらしい……その証拠に、頑丈なテーブルから軋むような音がした。ついでに皆がびっくりしたようにラルファスを見たが、レインは特に表情も変えない。

ああ、とうとうこいつを本気で怒らせたなぁと、内心でただそれだけを思った。

いつかそういう日が来る気がしてたのだ。

「わかったよ」

ごく平静な顔でレインは頷く。

「話があるんだな。なら、二人だけ別の部屋に移って話すか？」

返事代わりに、ラルファスは黙って身を翻した。そのまますっとサロンを出てしまう。おそらく、「ついてこいや」ということだろう。

レインは軽く手を上げ、皆に挨拶代わりとした。
「じゃ、そういうことで。俺はラルファスとちょっと話してくる」
「しょ、将軍っ」
皆が一斉に口を開いたが、最初に声を出したのはセノアである。彼女はちらっと開いたままのドアを見やり、声を潜めた。
「ラルファス殿は帯剣してましたぞ。念の為、将軍もご用心を」
「馬鹿だな」
レインは破顔して、忠実な副官に手を振ってやった。
「激怒してはいるが、そういう腹立ちじゃないだろうよ」
心配そうについてこようとするセノアやセルフィー達を目で抑え、レインは急いで友人の後を追った。

ドアから出ると、ラルファスは少し先で振り向いて待っていた。まだ顔は強張ったままである。おまけにレインが廊下へ出た途端、すぐにぷいっと背を向けて歩き出してしまう。これはもう、よほど激怒しているとしか思えない。
やむなく、レインは距離を置いて従った。今ここで話しかけても、おそらくまともな話になるまい……そう思ったのだ。

ラルファスは廊下の端へ至ると階段をさっさと下りていく。そして途中の階で王宮本棟へ繋がる石廊下（二つの王宮を結ぶ石橋）を渡り、本棟へと入っていく。まさか、睡眠中のシェルファを叩き起こして三人で話す気なのかとレインは疑ったが、これは外れた。本棟でまた階段を上り、自分の部屋がある階で廊下を曲がっていった。なんのことはない、私室で話そうというわけだ。
室内に消えたラルファスを追い、レインも勝手知ったる部屋に入る。後ろ手にドアを閉め、何歩か歩いたところで――いきなり殴られた。
もちろん、途中で勘付きはした。
ただレインとしては珍しく、迫り来る拳が見えていたのに、殴りかかるラルファスを前に棒立ちしていた。
我に返ったのは、思いっきりぶん殴られてドアに叩き付けられた後である。痛みには慣れているが、何しろ初めての経験で驚いた。
そういえば、殴られて即座に殴り返さなかったのも、レインとしては希有なことだった。

「レインっ」

初めて見る激怒の形相で、ラルファスがまた怒鳴りつける。しかも返事をする間もあったものではなく、レインは胸ぐらを掴まれて引きずられ、今度は酒が置かれた飾り

棚に豪快に叩き付けられた。酒瓶の置かれたその棚はおろか、周囲の丈の高い本棚まで揺れた。

「一体、どういうつもりであんなことをした‼」

「……ちょ、ちょっと待て、おい。そう揺するな。答えようがないだろう」

喉を締め上げられ、レインは苦しい息の下から何とか答える。

「少し落ち着け。しまいには、酒瓶がみんな床に落ちるんじゃないか」

「こんなもの、どうでもいいっ」

レインを突き飛ばし、何のつもりかラルファス自ら、飾り棚を力任せに倒してしまう。物凄い音がして、中にあったボトルが次々と割れた。たちまちアルコールの臭気が立ち籠め、床が濡れていく。

ラルファスはそちらを見向きもせず、喉元を撫でるレインに怒鳴る。

「なぜ、ゲイニス城に一人で突っ込もうなどとするっ。なぜ、最後に廊下で会った時、私に言わなかった！」

レインはまじまじと友人を見る。今頃気付くのも遅いが――

ずらりとボタンの並んだ裾長のコートは半ば肩からずれ、輝く金髪は艶がなくなってぼさぼさになっていた……いつものラルファスなら、決して有り得ない姿である。

友人はレインの視線も無視して、叩き付けるように続けた。

「よしんば死にに行くつもりだったとしても、どうしてあそこで私に声をかけなかっ

た！　なぜ、私も連れていこうとしないっ」
……何を言い出すんだこいつ、と眉根を寄せたレインにも反応せず、ラルファスはひたすら怒鳴る。本気で激昂していた。
「私達は友達だと思っていたが、それは私だけのことだったのか！　共に生き、共に死ぬのが友人ではないのかっ」
呆然と立つレインに、大喝する。
「なんとか言え、レインっ」
セリフと共に、唾が飛んできた。
確かにレインは、彼の逆鱗に触れたのだ。それも、これまでで最大の。
ラルファスが怒鳴る内容はかなり無茶苦茶だったし、レインが理解できない部分も当然、ある。
それでも……不思議と言い訳しようという気にならなかった。だからレインとしては、頭を下げるしかない。
「いや……俺が悪かった。この通りだ」
心からの謝罪を口にすると、やっとラルファスは黙り込んだ。
眉根を寄せてレインを眺め、本気かどうか見極めているようである。あるいは、今更ながらに冷静さを取り戻したか。
やがて得心がいったのか、思い出したように酒と破片まみれの床を眺め、目を瞬い

た。最後にまたレインを見た時は少し気まずそうな表情をしており、やっといつもの彼に戻ったらしい。
久しぶりに、普通の声音で呟いた。
「……鼻」
「は？　鼻がどうかしたか？」
ラルファスは曖昧に首を振り、歩み寄ると懐からハンカチを出して不器用にレインの鼻から口元にかけて拭った。
「鼻血が出てたんだ」
「あ、あぁ～、鼻血な。まあ、どうせ大したことない。気にするな……ほら、もう治りかけてるし」
そう慰めてやると、ぼそっと言い返された。
「おまえから見れば、私の力などアリの一撃のはずだろうに。私が殴ったくらいで、どうして鼻血が出るんだ！」
殴っておいて随分な言い草だし……付け加えれば、やたらと不機嫌そうだった。
「……前に言わなかったか？　いくらドラゴンスレイヤーだろうと、日常生活にドラゴン並みの筋力や能力は邪魔なだけで、むしろ害がある。だから、必要ない時はわざと能力を抑えてるって。そういう時にぽけっと油断してて殴られたら、そりゃ鼻血くらいは出る時もあるさ」

丁寧に説明してやったが、実際のところ、ラルファス自身の実力もあるだろう。見かけによらず、この友人はタフで強いとレインは思っている。もちろん、普通の人間としてはだが。

ともあれ、ラルファスは大きく息を吐き、首を振った。やや落ち着きを取り戻した表情で、レインをまた見やる。

「なあレイン、最近のおまえが少し妙なのは気付いていたが、私はそこまでは立ち入るまいと思っていた。もちろん、おまえの過去に何があったかもだ。親しい友人といえど、訊くべきじゃないことはあるだろうからな。しかし、やはり訊いておくべきだとつくづく思ったよ……おまえが消えた後、散々、後悔した。だから、この際吐き出してくれ」

「……なにもかもか？」

「ああっ。故郷を旅立つ前から始めて、最後までだ！　今回のことも、結局はおまえの過去に原因があるはずなんだ。なんなら、一杯飲みながらでもいい……頼む」

最後は懇願の口調だった。

別に悪気はなかったが、ついいつもの癖で、レインはニヤッと笑う。

「酒は全部、俺達の足下に流れたけどな」

次の瞬間、ラルファスが本当に心底困った顔をしたので、レインは思わず声を上げて笑った。考えてみれば、ここまで素直に笑ったのも久しぶりな気がする。

「……笑い事じゃないぞ」

怨ずるようなラルファスの声に、レインは慌てて手を振ってやった。

「わかってる、すまんすまん。全部話すから、とにかくまずこれを片付けようじゃないか……それからでいいだろう？」

レインとしては、気分を変えるためにそう言ったのだが、幸いにしてラルファスはすっかり素直になり、頷いた。こういう時、「んなものは、メイドを呼んでやらせればいい」とは決して言わないのが、この友人の良いところである。

「まあでも、そちらは暇そうなヤツらにやらせればいいかっ」

レインはいきなりドアに飛びつき、さっと開け放つ。

「きゃっ」

案の定、ユーリが足下を乱して入って来た――が。

「わわわ！　ちょっちょっとおっ、そんなに押したら――きゃあっ」

レインが気配を読んだ通り、こいつの後ろにも不埒者が大勢いた。真っ先に床に転がったユーリを先頭に、仲間が後から後からよろめき入り、彼女の上に折り重なって倒れていく。

「ぐえっ。重い、重ぃいいいい！」

死にそうなユーリの声を無視して、レインはバツが悪そうな皆に告げる。

「おまえら……主君の話を立ち聞きした罰として、ここの掃除な」

部屋の掃除はユーリ達に任せることとし、レインは早速、ラルファスと共に王宮内の別のサロンへと移った。

部屋の広さはほぼ同じだが、こちらはシェルファの私室に近い王宮本棟にある為、さすがに入室には厳然たる制限がある。用件があろうとなかろうと、身分によっては通してはもらえないのだ。よって、ここなら話し込んでいても邪魔が入る恐れはまずない。

立ち聞きしようにも、昼間は階下に常駐している衛兵がいるのでできない。仮に入室可能な身分の者が訪れたとしても、上将軍二人が話し込んでいればさすがに遠慮してくれるはず。いや、本来はラルファスの部屋も同じことなのだが……将軍格のレニやセノアもいたので、大丈夫だと思ったのだろう。

ともあれ、別棟のサロンと同じく、ここも今はテーブルクロスが外されており、人の気配はまるでなかった。

友人に奥の小さいテーブルを指し示すと、レインはサロン備え付けの飾り棚から、わざわざ一番高そうな北部産の酒瓶とグラスを持って来て、どんっとばかりに置いた。

自分のとラルファスのグラス両方に並々とウィスキーを注ぎ、まずは一息に飲み干す。

静かにグラスを戻すと、告げた。

「さて……では、おまえが聞きたいことに答えるか。まずは、俺の昔の話……だったな？」

「ああ！」

ラルファスは大きく頷いた。

「ぜひ聞きたい」

「じゃあ、あの晩以前から話そう……俺がかつて、フィーネに夢中だった頃からだな」

……包み隠さず、淡々と語った。

当時の自分が今とはまるで違う性格だったことを含め、全て。もちろん、あの夜の出来事も含めてだ。

時は流れ、自分もまた変わっている――とレイン自身は思っている。

……いや、変わっているどころではなく、当時の「大人しく穏やかだった少年」など、既に思い出と共に消え去ってしまった。

フィーネの優しい記憶と一緒に、粉々に砕けてなくなってしまったのだ。もはや、二度とあの頃の自分に戻れはしない。だから、レインとしては語ったところでもう何も感じまいと思っていたのだが……あいにく、今回も以前と同じだった。

この話を誰かに聞かせる時はいつもそうだが、特に話があの吹雪の夜の件に差し掛かると、すぐさま当時と同じ激情が込み上げてきた。

友人には気付かれなかったと思うが、自信はない。シェルファやセルフィー、それに他の仲間に話した時もそうだったように。

それでもとにかく、レインは平静を装って話を続けた。

「――サンクワールへ来たきっかけは話したな？　不思議な導きがあって、戦いを望むなら、先王の招聘に応じてこの国へ来るのが一番だとわかったからだ」

ラルファスの返事も待たず、レインは静かに話を結んだ。

「後は、知っての通りさ。俺は今もこうして戦っている。昔と違い、姫様を守るという目的はあるが、かつて心に誓ったことは今も変わらない」

なんとなく、遥かな高みにある天井を見上げる。

そこに描かれた見事な風景画を眺めつつ、独白する。

「誰よりも強く、この世のどんな存在よりも強く！　そして、何物にも屈することのない強靭な心を。……いやぁ、馬鹿みたいな誓いだな、これ」

友人は沈黙したままだった。先程までは顔を上げて熱心に聞いていたが、今は下を向き、テーブルの木目を眺めているような目つきだった。

そのうち、金髪を掻きむしって息を吐く。

「おまえがどんな男かはよく知ってる……どう考えてもおまえの責任ではないはずだが――」

とそこで、やっとレインと目を合わせた。

「そんな慰めで、僅かでも癒されはしないだろうな」

「おまえが言おうとして呑み込んだことは、俺にも十二分にわかってる……おまえは正しい」

レインは短く答え、また酒を注ぎ足す。

ボトルを置くや否や、ラルファスが素早く手を伸ばし、自分もたっぷりと注いだ。

「くだらない感情だし、死んだフィーネだって喜ぶはずがない。彼女を殺した敵だってもういないから、復讐すら不可能だ。いや、仮に復讐が成ったとしても、それでフィーネが生き返るわけじゃない。時は二度と戻らないからな。つまり、俺の誓いなどつまらない寝言も同然だ。ガキのわがままもいいトコだ。忘れて、まっとうな道に戻る方がいいに決まってる」

レインが穏やかに言い切ると、ラルファスは驚いたように碧眼を見開いた……一瞬だけ。しかし、特に口は挟まない。

「だが、いかに正しかろうと、他人がどう思うかは関係ない！」

激することもなく、レインは普通の声音で続ける。

「これは俺自身の問題だし、俺の魂が忘れることを拒絶するからだ！　あの吹雪の夜が、俺にとっちゃ生涯のうちでもっとも戦うべき瞬間だったかもしれないのに、当時の俺はただの弱いガキに過ぎなかった。未だに自分を許すことができないでいるし、いつか心から笑える日が来るとも思えない。遠い昔にあるヤツが俺に言ったセリフだが、これは俺が背負っていくしかない十字架だろう」

ラルファスが初めて目を瞬いたのを見て、レインは舌打ちした。気を付けていても、こうして出る時は出てしまうから困りものである。

「いや、すまん。当時は俺も知らなかったんだが、十字架ってのはつまりたとえさ。遠い異国で使われてるセリフで、ここらじゃほぼ誰も」

そこでレインは思い出し、肩をすくめる。

「とにかくまぁ、そんなに大勢は知らないはずだ」

「おまえのその、異国とやらの話も改めて聞かねばならないが」

ラルファスはまた息苦しくなるような真剣な顔でレインを見た。

「だが今は、ぜひとも先に尋ねることがある」

特に声も低めず、ずばり訊いてきた。

「……最近のおまえ、どこかおかしいぞ。私の想像に過ぎないが、何か予感めいたものがあるんじゃないか？　もしそうなら、ここで話してほしい」

反射的にレインは唸った。

とぼけることもできたが、どうせこいつにはお見通しだろう。というより、自分では全くいつもと変わりなく過ごしているつもりなのに、そういう演技に誤魔化されないヤツが、周囲に多すぎる気がする。

レインは長々と息を吐いた。

「わかったよ……別に大したことじゃないんだがな」

そう断りを入れ、あっさり教えてやった。

「実のところ、俺には死の予感がある」

がたっと音がした。

うろんな顔でレインが見上げると、椅子を鳴らしてラルファスが立ち上がったところだった。息を詰めたような顔でレインを見下ろしている。

「本当か⁉」

「いや、とにかくまずは座れ。少なくとも明日や明後日の話じゃない。……多分だが」

レインに言われ、ラルファスはようやくそっと座った。しかし、未だに表情が凍り付いたままである。ひょっとしたら「考えすぎだ」と笑い飛ばしてくれるかと期待していたのだが、どうやらそれは甘かったらしい。

「……言っとくが、単なる予感だぞ？　何の根拠もない。なんでまた、思いっきり信じた顔してんだ、おまえ」

「おまえの予感が外れたことが、これまでにあったか⁉」

記憶にないほど奇妙な声音で、ラルファスが指摘する。

どうしてこんな妙な声を出すんだ、とレインは不可解に思ったが、少し考えてようやく腑に落ちた。おそらく今の声には、これまでにこの友人から聞いた覚えのない、「恐怖」に近い感情が混じっていたのだ……信じがたいことに。

「そうかもしれんが、死が間近に迫っていると思ったのは、何も今回が初めてじゃない

からな。いつもと違うのは、妙に実感を持ってその時が近づいてくるのを感じている――ということくらいだ」

「誰がおまえを殺す？　レイグル王……か」

ラルファスがひそひそと問う。

感情を抑えるかのように、声を低めていた。

「それがわかれば苦労はないな。俺は別にそっち方面の力があるわけじゃないんだ。あくまでも予感に過ぎないし、根拠もない。さっき言った通りさ……死の息吹を間近に感じるだけだ」

「ならば、これから何とかすればいいっ。まだ起こっていない以上、未来が変わる余地はあるはずだ！」

身を乗り出してそう迫る友人を、レインは言葉もなく見返した。無茶を言うヤツだと思ったのではない……自分が、レイン自身が一度もそう考えたことがなかったことに、今更のように気付いたからだ。

俺は……知らず知らずのうちに死を望んでいるのか。死の向こうに安息があると？　死ねば、フィーネのことはチャラになるとでも思っているのだろうか。だとしたら――それは俺が一番嫌う、戦いから逃げる人生とどこがどう違う？　自殺と変わらないじゃないか。

図らずもラルファスのお陰で、フィーネが亡くなった直後のことを思い出した。あの

当時もレインは、自ら死を選ぶ寸前だったのだ。

当時、辛うじて踏み止まったというのに……俺はいま再び、同じことをしようとしているのかもしれない。

必死で訴えかける友人を見つめたまま、レインは一人で考え込んでいた。

――☆――☆――☆――

日が傾きかけたその頃、ふらりとガルフォートの城門に現れた者がいる。

黒瞳黒髪の女性である。

漆黒の上衣は裾が後ろに長く、見かけは重厚な燕尾服に似ている。女性らしく、一応は上衣の下にレース飾りのついたブラウスも着ていたが、何しろ上着がそんな有様なので、ほとんど目立たなかった。物静かな麗人に見えるが、切れ長の目があまりにも冷たく光っていて、浮わついたところなど微塵もない。

唇はきっと引き結ばれ、手が腰に……それも、長大な刀の柄に置かれていた。

もちろん、見るだに怪しすぎる彼女が跳ね橋を渡って近づいた時、城門の衛兵達はたちどころに身構えた。手にした長槍を交差させ、大声で呼ばわる。

「そこで止まれっ」

長身痩躯の女性は、言われた通りに立ち止まった。

ただし、未だに刀の柄に手がかかったままである。
「何者かっ」
「私の名前はアリサだ」
アリサは顎を上げ、堂々と名乗った。
「この城に、レインという男がいるはずだ。そいつに話がある……取り次いでもらいたい」
思わずといった感じで顔を見合わせた衛兵二人に、アリサは続けた。
「……傾国の剣とやらを持っている長身黒髪の男だ。ここの上将軍だと街で聞いたぞ」
衛兵達はさらに当惑顔になった。
それでも一応、言葉を改めて訊き返したのは、重臣であるレインに配慮してのことだろう。
「失礼ですが、上将軍のお知り合いですか？」
「いいや、ただの顔見知りだ。しかし私は彼に訊きたいことがある！」
強い口調で言い切るアリサに、衛兵達は無意識のうちに後退った。この女性から、とてつもなく危険な匂いを嗅ぎ取ったからだ。
そもそも口調からして、平和的な会見を望んでいるようには見えない。むしろ決闘でも申し込みそうな雰囲気だった。
「た、ただの顔見知りなら、まずは書面にて面会の申し入れをしてもらいたい！　仮にも一国の上将軍に、そんな簡単に会える訳がないだろうっ⁉　それに、上将軍はつい

数時間前にお戻りになったばかりなのだ」
一人がたじたじとなりつつも言い返すと、アリサは小さくため息をついた。
「悪いが、書面など悠長に書いてる気分じゃないわ。通す気がないのなら、押し通るまで‼」
「なにっ」
「我らを甘く見るか！」
さすがに憤慨した衛兵達は、心を奮い立たせ、とっさに槍を持ち上げようとした。だが、手を数センチも動かさないうちに、風のように踏み込んできたアリサが、二人の首筋に手刀を叩き込む。たちまちにして大の男が二人とも伸びてしまった。
「……面倒ね。王宮に突入して暴れ回る方が早いかもしれない」
アリサが物騒な呟きを洩らしたのは、城門を通過して幾らも歩かないうちに、たちまち新たな衛兵達が駆け付けてきたからだ。
近くには当然ながら彼らの詰め所があり、今の騒ぎはとうに見つかっていたのだ。衛兵が二人だけだと思ったのは、全然甘かったようだ。
今度は全部で十数名もいるし、手にした笛を吹き、さらに大勢の衛兵を呼び集めようとしている者もいる。さすがは一国の主城だけあって、簡単に侵入できない。よく考えれば当然のことだが、周囲のことなど構わなくなって久しいアリサは、その辺を考慮すらしなかったのだ。

「だが、私を止めることなどできないぞっ」
走り出そうとしたアリサは、しかしぶらりと前からやってきた男を見て、思わず足を止めた。
なぜか最初から不機嫌この上ない顔つきであり、しかもこいつだけは、アリサを見てもまるで慌てなかった。
意外にも名のある臣下だったのか、衛兵達がほっとした様子で声を洩らす。
「ギュンター様！」
「ここは、私が引き受けます」
ぼそっと彼は呟いた。
「はっ……いや、しかし」
腰まである緑色の上衣を着込んだ騎士見習いの隊長は、困ったようにギュンターを見た。
「役目柄、そういうわけにもいきませぬ」
「私も、単に足止めするだけです。それなら、一人の方がいいのです。受け入れにくい頼みなら、単純に命令だと理解して頂いて結構」
とことん素っ気ない言いようであり、視線は既にアリサに向いていた。
無愛想かつ不機嫌なこいつはかなりの発言力があるのか、衛兵達も大人しく下がっていく。

遅れて、王宮の方角からなぜか可愛い女の子が息せき切って駆け付けてきたが、彼女もまた観戦する方に回ってしまった。何のために駆け付けたのかわからない。
ギュンターはそちらを見てなぜかため息をついた後、アリサに言った。
「何者かは存じませんが、しばらくお待ち願えませんか。どうせ、もうすぐ我が主がここに来られるはず……それまで、大人しくして頂きたい。なんでしたら、奮発して紅茶くらいは出しますが？」
丁寧ではあるが……言葉の全てが棒読み口調だった。アリサを見る目つきも素っ気なく、まるで関心がないように見える。いや、むしろ非常にめんどくさそうだった。
「レインも大いに気になるが、おまえも少し気になってきたわ」
アリサは低い声で問う。
今も感じる不可視の波動に、判断がつきかねていた。
「一体、何者だ？　普通の人間にしては、感じる力の波動が群を抜いて大きすぎる。まさか――」
「私はこの城の警護を担う、総責任者です」
途中でギュンターとやらが遮った。
間髪を入れずに言い切ったのはいいが、取り巻いていた衛兵達が「えっ!?」と愚かし

い声を上げて一斉に彼を見た。馬鹿らしいことに、彼らも初耳だったらしい。
駆け付けてきたばかりのはしっこそうな女の子が、「大嘘じゃないですかあっ！」と一番でっかい声で喚いていた。
「こいつらは違うと言いたそうだぞ！」
「でしょうね。上に『影の』と付きますし、他にも役目はあるので。しかし我が主からは、そのつもりでいるようにと仰せつかっております。だから私が在城中には、面倒ごとは避けなければならない。面倒ごとというのは、見知らぬ客人が城内をうろうろすることも含めてのことです。ご理解頂けますか？」
からかわれているのかと思うようなセリフだが、本人は至って大真面目だった。どこまでも堂々たる態度なので異議を唱えにくいが、口調が淡々としていて、大それた内容と全然そぐわない。
アリサはすっと黒瞳を細め、腰を落とす。
「いや、悪いがちょっと試したくなった。おまえもだし、この城からは他にも怪しい気配を幾つか感じる――からなっ」
語尾を背後に置き去りにし、アリサはいきなり走り出した。

新たに与えられた能力全開で疾走すると、いつものように時間が飛んだような感覚があった。もちろん単なる錯覚に過ぎないが、自分の周囲の全てが、間延びしたノロ臭い

動きに見えてしまう。
なぜか、自分だけが違う時間帯の中に入ってしまった……そう感じることもあったほどだ。
これは、（ある程度までは）傭兵時代より少しずつ自覚し始めていたことだ。当時もその違和感が大きくなるにつれ、だいぶ戸惑ったものだが――
今のアリサならわかる。
修練や実戦を積み重ね、どこかで限界を超えた途端、アリサはそれまでとは大きく違う世界へと足を踏み入れてしまったらしい。
ほとんどの場合、上達したいのなら階段を一歩一歩上がるように修練を積み重ねていくしかないはずだが、しかし人によっては例外もあるということらしい。
そこまで至る者は少ないながら、ある段階で劇的に違う世界が開けることもあるのだと……アリサはそう悟った。
血の滲むような修練と実戦の先に、意識が拡張するような感覚が訪れ、それまでは不可能だったことが容易く成し遂げられるようになったりする。
それが、一部の者達が密かに噂する、エクシードと呼ばれる能力に目覚めたお陰だと知ったのは、だいぶ後になってからだ。瞬発力、スピード、そして見切り……アリサの場合その執念故か、エクシードの恩恵はおおよそ戦闘に関するものが多かった。
かつて以上に敵の動きが緩慢に見え、そして「私は真実、別の時間帯にいるようだ」

と思う機会が激増した。
しかし実際はそうではなく、アリサの方が敵の踏み込めない次元に到達してしまい、見切りの精度も飛躍的に上昇し、相手の動きが児戯に等しいレベルに見えるようになってしまったのだ。
もはや、見ている世界が違うとすら言える。
もちろん、このエクシードとて万能の能力ではないが、存在を知ってその世界に踏み込めば、実戦で格段の差が出るのは当然のことだ。
古くは「気」とも呼ばれた高次元の潜在能力と……さらに今は、ドラゴンスレイヤーとしての圧倒的な身体能力が、アリサに人の領域を越えたスピードを約束してくれるのだ。

事実、一瞬で間合いを詰め、抜き放った魔剣サクリファイスを頭上に落とす寸前まで、渋面のギュンターは剣の柄に手をかけてすらなかった。明らかに、他の凡庸な戦士と同じ反応である。アリサと同じく、エクシードに目覚めているとは思えない。
――感じた力は気のせいだったか！　こいつはただの人間なの⁉
アリサが戸惑ったその一瞬、しかし変化は訪れた。
ギュンターがいきなり息を吹き返したような唐突な動きを見せ、寸前でアリサの剣撃を避けて見せたのだ。

素早く身を捌いて体勢を入れ替え、逆にアリサに斬撃を放ってきた。
静止した世界の中で、アリサとギュンターのみが動いていた。

――私の世界に入るかっ。

そう意識した刹那、アリサは反射的に敵の動きに応じ、身を翻して長大な魔剣を横殴りに叩き付けた。
激突した二振りの剣の間で激しい火花が散り、筋力に劣る敵は他愛なく体勢が崩れた。
それでも勢いに逆らわずに自ら後方へ飛び、宙で回転して地上に降り立ってみせた。そこでよろめいて膝をつきそうにならなければ、アリサはさらに警戒しただろう。
振り切っていた刀を静かに戻し、アリサは軽く首を振るギュンターを見やる。
「受け止めただけでも大したものだが、腕が痺れたようだな」
ほっと息を吐く。
「……おまえは入り口まで来ているらしい。自ら覚醒したのか、あるいは誰かからエクシードのことを教わったのかは知らないが、人間としては恐るべき男かもしれない。だが、私の敵ではないとわかった以上、もはや勝負など無用のことだ」
「買い被られても困りますが……たとえ勝ち目がなくとも、私も退くわけにいきません」
相変わらず愛想のない返事に、アリサが口を開くより先に――

横から声がした。

「ていうかぁ、何が起こったのか全然見えなかったんですけど。世界がどうとか、意味もわからないし！」

口出しされ、アリサとギュンターは二人同時に観戦していた女の子の方に首を巡らせる。膨れっ面の彼女は、いたく不満そうだった。

「風の音とやかましい剣撃の音が一回鳴っただけだしー。身体もロクに見えなかったしい。もっとこう、わかるようにガンガンやってよ……じゃなくて、やってくださいよ！見てて張り合いないじゃないですかっ」

「ロクに見えないのは、おまえが我らの知る世界から遠い場所にいるからだ」

アリサが魔剣を鞘に戻しつつ素っ気なく答えると、なぜかギュンターもじろりと件の少女を眺めた。知り合いだったようだ。

「ごく簡単に言えば、『引っ込め、この未熟者がっ』ということですな。個人的には、『掃除をサボるな愚か者が！』と付け加えたいですな」

「あ、あそこにいなかったのに、なんでそのことを！」

黒髪の女の子はやたらとたじろいだ様子を見せたが、アリサにとってはどうでもよい。魔剣をだらりと構えたままギュンターを見る。

立ち読みサンプルはここまで

「いきなりの無礼はお詫びする。……しかし、この城に入った瞬間、妙な気配を感じたのは事実だし、レインという男に用があるのも確かだ。悪いが、彼にはどうあっても会わせてもらう」

「断じて止めるのが私の役目ですが、どうやらその必要がなくなったようです」

ギュンターは急に、あっさりと真っ黒な剣を鞘に戻した。簡単にすっと身を退く。

これまでの頑固な態度が、嘘のような素直さだった。

「後は、我が主がお決めになること。私の出る幕ではありません」

誰のことだ、とアリサが訊くまでもなかった。もはや忘れようにも忘れられない力の波動が近づくのを、はっきり感じたからだ。

アリサがキッと前を見据えると、例の黒ずくめのレインとやらが、誰かと連れだってこちらに来るところだった。

☆――☆――☆

何者かの侵入を感じてレインが急行してみれば、見覚えのある女戦士がこちらを睨んで立っていた。……というか、見覚えがあって当然である。なにしろ少し前に、郊外の森で放り出してきたところである。

「うわ、もうここがバレたのかっ。しばらくは来ないかと思ったのに」